〔書　評〕

秋永一枝著

『東京弁アクセントの変容』

相　澤　正　夫

はじめに

著者の秋永一枝氏は幅広いアクセント研究で知られるが，氏の長年にわたるこの分野の仕事のうち「東京弁アクセントについての書き物」(「はじめに」)を一冊にまとめたのが本書である。40年をこえる研究のひとまずの取りまとめにあたり，自らの研究を書名の示すとおり「東京弁アクセントの変容」と総括したところに，著者の研究姿勢が最もよく表れている。振り返って見れば，この間一貫して「東京弁」を対象としながら，その「変容」すなわち様変わりを論じてきたというのである。その意味で本書は，例えば「東京語アクセントの変化」というタイトルでは決して収まりきらない内容と独自の書きぶりを含んでおり，著者ならではの個性あふれる論文集となっている。

本書の構成

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに
I　アクセント推移の要因について
II　アクセントから文法へ——品詞の弁別について——
III　江戸アクセントから東京アクセントへ
IV　アクセントのゆれと今後の動向
V　言葉の馴染み度と発音・アクセント
VI　東京弁アクセントから首都圏アクセントへ
VII　東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退
VIII　字音一字語のアクセント
IX　アクセント核の移りと聞こえの方言差——母音の無声化を中心に——
X　東京弁音声の衰退
付録　東京アクセント第一次調査報告
　　東京都区内生育者における調査報告　昭和28～30年
初出一覧
あとがき

索引［術語索引，図・表索引，人名索引，書名索引］

「初出一覧」によれば，論文の発表年代は1957年から1996年までのほぼ40年間にわたる。しかし，この間必ずしも一定のペースで発表されたわけではなく，ⅠからⅢまでが最初の10年に，その後20年余りの空白をおいて1990年代に入ってから一気にⅣからⅩまでが発表されており，時期的な偏りが著しい。

空白の期間は，著者のもう一方の関心領域である「史的アクセントの研究に力を割いていたため」(「はじめに」)に生じたものと思われる。この間は東京弁アクセント研究の空白を見事に埋める形で，大作『古今和歌集声点本の研究』が，『資料篇』(1972)，『索引篇』(1974)，『研究篇上』(1980)，『研究篇下』(1991) の順に着々と刊行されている。

また，実質的に秋永氏の著作と見なしうる『明解日本語アクセント辞典　第二版』が1981年に出ていることも忘れてはならない。著者の東京弁アクセントに関する業績は，実は本書に収められた10篇の論文だけをもって語ることはできないのである。否，むしろアクセント辞典の「本体」とその巻末に付された「東京アクセントの習得法則」の中にこそ，著者の長年にわたるアクセント研究の成果が，もれなくむだなく結実していると見るべきであろう。その意味において，本書のような論文集に収められた文章は，このようなアクセント辞典の存在を前提としつつ，それを念頭におきながら読まれなければならないと考える。

本書の内容

すでに見たように，本書に収録されている10篇の論文は，執筆時期によって大きく二群に分かれる。ⅠからⅢの3篇が初期の論文，ⅣからⅩの7篇が最近の論文である。この執筆時期の大きな隔たりは，論文の内容にも反映しているように思われる。

初期の論文では，アクセント現象を捉える上での基本的な考え方や方法が検討されている。1958年に『明解日本語アクセント辞典』の初版が出ているが，Ⅰ，Ⅱはそれに先行して1957年に発表されている。いずれもアクセント辞典を編纂する過程で直面した問題を整理するために，一度は書いておかなければならなかった論文であったとの印象が強い。

「Ⅰ　アクセント推移の要因について」は，現実に変動して止まない個別的なアクセントの多様性をどのような枠組みの中で捉えるべきか，あるいは，ある語のアクセントはどのような要因によって決定されるのか，複雑で扱いの難しい問題を正面から論じようとしたスケールの大きな論文である。著者はここで「アクセント三角錐」なるモデルを提案し，「任意の語がいかなるアクセントの型をとるかは，『語彙』『場』『時』『人』を頂点とした『三角錐』の，4点及び6辺の相互関係により決定され，それによってアクセントの推移が行なわれる」とした。このモデルの登場によって，複雑多岐にわたる諸要因間の関係づけが，初めて見通しのよい形で整理されたように思われる。

小稿の筆者(相澤)も，実はこのモデルの恩恵を大いに被った一人である。それは1980年代のことであるが，それを溯ること20年以上前にすでにこのような網羅的な考察がなされていたことに対して一種畏敬の念をいだいたものである。その気持ちは現在も変わっていないが，ただ一つ用語の問題として，「場」という名称には当時からずっと引っ掛かりを感じている。これは，例えば「所(ところ)」とすべきではないか。私見では，「場」というのは「所」と「人」のおりなす複合概念である。アクセントに限らず広く伝統的な文化の伝承と断絶は，人々の生活環境のありように負うところが大きい。むしろその生活環境のありようこそ，「場」と呼ぶにふさわしいものと考える。

「II アクセントから文法へ——品詞の弁別について——」は，文法研究で参照される音韻現象から何故かアクセントが除外されがちであることに対して，アクセント研究の立場から異議申し立てをした論文である。著者は，実際にアクセントが品詞の弁別に役立っている例を豊富に示しながら，アクセント現象にも十分に目を向けるべきことを説いている。無意識のうちに書記言語に立脚し，それで事足れりとしている文法研究に対して，音声言語研究の側からの貢献の道を示しているのである。この論文も，アクセント辞典の付録として「東京アクセントの習得法則」をまとめる過程で，いわば必然的に産み出された成果のように感じられてならない。

初期の論文のうち，IとIIがいわゆる一般論であるのに対して，「III 江戸アクセントから東京アクセントへ」(1967)は，東京アクセントを個別に取り上げた論文である。その意味では，結果的にはIV以下の最近の論文へとつながっていく，その基礎を固めた論文でもある。明治以降の東京アクセントの推移をたどるには，その前段階の少なくとも幕末から明治初めの頃の江戸アクセントを，その起点として確定しておく必要がある。しかし，この時期の東京アクセントを記した文献資料は存在しないのである。著者は，断片的ではあるが，辞書類のアクセント注記，東京旧市内で生育した老年層のアクセント，歌舞伎・落語など伝統芸能のアクセント，各地の方言アクセント，アクセントを記載した古文献との型の対応，などの情報を総合して江戸アクセントの推定を試みている。その結果は，次の五つの知見にまとめられている。

①母音の無声化によるアクセントのずれは今より多かった。
②動詞＋動詞の複合動詞には接合型が今より多かった。
③感情のこもった接頭語のつくものは頭高型が今より多かった。
④複合名詞には接合型が今より多かった。
⑤語末に滝のある名詞が今より多かった。

ここでの「今」は1967年頃のことであるから，それより100年以上前の江戸アクセントの特徴として以上のことが推定されている。およそ1世紀の間に，頭高型と尾高型，そして接合型（複合語の前部成素のアクセントを生かす型）が急速に衰退に向かっていることを，著者はすでにこの時点で確認せざるをえなかったのである。

さて，初期の論文から20年以上が経過した後，1990年代に入って発表されたのが「IV アクセントのゆれと今後の動向」以下の論文である。この間，著者は1981年に『明解日本語アクセント辞典　第二版』の刊行を果しているが，その一方で1985年には大規模な組織的調査に基づく柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編『東京語アクセント資料　上・下』の刊行があった。いずれも東京アクセントを対象としているとはいえ，両者の間には情報提供者としての話者の認定に関する基本的な考え方に大きな違いがあり，伝統アクセントを重んずる秋永氏の立場からすれば，相当な抵抗感があったものと思われる。

以下は一つの仮説であるが，1990年代に書かれたIVからXまでの7篇の論文は，このような抵抗感に端を発する大小さまざまな問題に対して，著者が自らの立場から改めて納得のいく解答を模索した結果と言えるのではないだろうか。ほぼ同時期に走っていた文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」は，そのための新規調査を企画・実施する上でも，また大学院生等を共同研究者として動員する上でも，格好の後押しになったものと思われる。

ここで一番の大きな問題は，「東京」の地理的な広がりをどう規定するかである。『東京語アクセント資料』の話者の生育地に関する条件は，終戦後に拡張された現在の東京23区内ということであった。「東京語」とは，実質的にこの範囲で生育した人の話す言葉ということであり，見方によってはかなりゆるい基準と言えるだろう。一方，秋永氏が設定する話者の条件は，東京旧市内15区の内の生育者ということで，格段にきびしい基準となっている。ちなみに面積で言えば，前者と後者の間にはおよそ6対1という大きな開きがあるのである。(本書55頁「東京区分図」参照)

時代とともに東京の範囲は拡大をとげてきたが，その拡大に歩調を合わせていわばその都度の東京語を認定する立場をとるか，それとも江戸語以来の流れをくむ本来の伝統的な東京語を尊重する立場をとるか。秋永氏は，東京語という名称がしばしば議論に混乱をもたらしていることを懸念しそれに配慮して，伝統的な旧市内の東京語を「東京弁」と呼び，拡大を続ける東京語の方を「東京共通語」あるいは「首都圏語」と呼んで，両者を意識的に区別する立場を選んでいる。「VI 東京弁アクセントから首都圏アクセントへ」は，このような趣旨で書かれた論文であり，次に引用する最終段落からは著者のある種の諦念と決意が同時に伝わってくる。

> 今後東京弁から東京共通語・首都圏語への変化をたどることは時間の問題としても，それぞれの資料を扱う際は地域をきちんと限定して論じておきたい。「東京語」という漠とした表現をする場合は，何を東京語とするかという規定が必要だと思っている。筆者は暫くは「東京弁」という規定を定めて，幕末から明治・大正・昭和というほぼ百年の，江戸弁から東京弁への推移を調べてゆきたい。それは長らく言語の島であった東京弁の終焉を記す作業となるに違いない。(本書129頁)

著者が自らに課した作業を遂行するためには，話者として次の三つの条件を同時に満

たす「東京弁の使い手」が必要であるという（本書132頁，注17）。これはすでに現時点では相当にきびしい条件になっているはずである。

①御一新から敗戦までに言語形成期を終った人。

②東京旧市内（東京旧15区内）で言語形成期を過ごした人。

③両親または保育者も，江戸黒（墨）引内か東京旧市内で生育の人。

ここで①②③の条件は，それぞれ「いつ」「どこで」「どんなふうに」言語習得が行われたかに対応している。①と②は，東京弁の話者として満たすべき当然の条件と思われるが，さらに③が加えられていることに著者の独自性を感じる。言語文化の伝承にとって直接的な生育環境がいかに重要であるか，著者は十分すぎるほど認識しているのである。そのための指標として③を取り上げるのは，きわめて妥当な措置と言えよう。

言葉は，現実の生き生きとした場面で，音声を媒介として若い世代に習得されれば，確かな実感を伴って正確な伝承が行われる。一方，言葉の形だけが文字を媒介として習得された場合には，本来の音声の正確な伝承からはどうしても遠ざかってゆく。著者は，「V　言葉の馴染み度と発音・アクセント」において，「馴染み度」という観点を導入し，その話者が自信をもって使える使用語彙かどうかということが，伝統的な発音やアクセントの保持に深く関連していることを，地名・人名をはじめとする豊富な実例によって例証している。

これは裏を返せば，発音やアクセントを聞くだけで，その話者がその言葉の指示物を本当に知っているかどうか，あるいはそれに馴染んでいるかどうか，分かってしまうということでもある。いわゆる「専門家アクセント」も，言葉への馴染み度が関わる現象と考えられるが，両者をどう整理すべきであろうか。馴染んでいるからこそ伝統的アクセントが保持されるという側面と，より深く馴染んでいくと平板アクセント化するという，性質は違うが両様の側面があるように思われる。

すでに見たように，著者は，初期の論文IIIにおいて，後にあえて東京弁アクセントと呼ぶことになる伝統的東京アクセントの特徴を五つ取り出している。「VII 東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退」「VIII 字音一字語のアクセント」「IX アクセント核の移りと聞こえの方言差――母音の無声化を中心に――」の各論文は，IIIの発表以来ずっと著者の念頭にあったはずの個別の問題を，改めて詳しく検討しなおしたものである。また，「X 東京弁音声の衰退」は，アクセント以外の特徴的な東京弁音声について，やはり衰退が避けられないことを確認したものである。これら4本の論文は，いずれも詳細な事例研究として貴重であり，それぞれに得難い情報が満載されている。

全体的な感想

本書全体を読んでみての感想は，やはり「著者ならではの個性あふれる論文集」ということに尽きる。著者は「東京弁アクセントについての書き物」という言い方をされ，

論文という言葉を意識的に避けておられるように見える。「論文なんて野暮な」と言われそうな気もする。そうではあるが，しかし，論文と言ったのではむしろ足りない，強いて言えば「書き物」としての魅力が，本書に収められた文章には随所に感じられるのである。

それは，一つには著者独得の批評精神によるものと思われる。例えば，次のような箇所に出会うと，その思いを強くする。

- …そう言えば先日の朝日新聞「女ひと四季」に，振袖の「そぞろ歩きの裾から，二人に一人はストッキングが見え，思わず天を仰いだ」と慨嘆する文があって，こちらのほうが仰天した。和装用のストッキングは寒さよけではなくて，あらわに向う臑を見せないためのもので，大正は知らず，昭和の初めには既に使われていた。たかがストッキングというなかれ。これから述べる和服関係用語ともなると，アクセントまで変化が起るのである。(本書 79 頁)
- …先日 NHK の朝の番組でゆかたを見に行く場面があり，女性アナウンサーが「次は着物屋さんです」と言ったのには驚いたが，「呉服」という場合はもっと馴染み度が低くなるであろう。(本書 96 頁)
- …また，「手鍋」も下げず，「手まり」もつかぬ御時世では，中年層以下の馴染み度も低くなり，これらの頭高型や尾高型よりも多数型の平板型に移ることばもある。(本書 156 頁)

また，言葉が実際に生きて使われる「言語使用の現場への執着」といったものが，全編を通じて強く感じられるのも見逃せない特徴である。おそらく東京弁のネイティブとして，内省も含めて微細な観察がすみずみにまで行きとどくことによるのであろう。ウチの目と体験が生きていると言ったらよいであろうか。

一方，論文として見たときに，多少気になる点がないわけではない。図版が多いのは大いに歓迎されることであるが，レイアウトの関係からか本文からの言及先が分かりにくいところがあった。また，図表そのものの見方についても，もう少し丁寧な説明があってもよかったのではないかと思う。なお，誤植と思われるのは，次の 2 箇所である。39 頁 10 行目の(ロ)は(ニ)の誤り，73 頁 4 行目の「ジョンジョョコチョー」は「ジョンジョヨコチョー」の誤りか。

おわりに

本書の著者が長年にわたり主導的に関わってきた『明解日本語アクセント辞典』は，第二版の刊行からちょうど 20 年後の本年，『新明解日本語アクセント辞典』と書名を改めて装いも新たに刊行された。事実上は旧著の第三版であるが，すでに述べたように本書に収録されている諸論文が，引き続きこのアクセント辞典への注釈，あるいはコメント行の役割を果していることは言うまでもない。

著者にはまた，「消えゆく東京弁」(1994) というタイトルの論文と，『東京弁は生きていた』(1995) という題名の著書がある。いずれも本書と合わせ読まれるべき文献であるが，その中で，消えゆく言葉を実際の言語使用の場で追いかける著者の目には，絶滅に瀕した生物を本来の生態系の中に追いかけ慈しむ目に通ずるものがある。

「消えゆく」と「生きていた」の間でゆれる東京弁の一語一語について，著者にはもっと語ってもらいたいものだと願わずにはいられない。

参考文献

秋永一枝 (1994)「消えゆく東京弁」『国学院大学日本文化研究所紀要』74
――― (1995)『東京弁は生きていた』ひつじ書房
相澤正夫 (1984)「アクセント変化の要因」『日本語学』3-11
――― (1992)「進行中のアクセント変化――東京語の複合動詞の場合――」『研究報告集 13』(国立国語研究所報告 104)
――― (1996)「語の長さとアクセント変化――『東京語アクセント資料』の分析――」『国立国語研究所研究報告集 17』

資料集・辞典類

柴田武監修, 馬瀬良雄・佐藤亮一編 (1985)『東京語アクセント資料　上・下』(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集)
金田一春彦監修, 三省堂編修所編 (1958)『明解日本語アクセント辞典』三省堂
金田一春彦監修, 秋永一枝編 (1981)『明解日本語アクセント辞典　第二版』三省堂
金田一春彦監修, 秋永一枝編 (2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
NHK 放送文化研究所編 (1998)『新版　NHK 日本語発音アクセント辞典』NHK 出版

(1999 年 3 月 20 日発行　笠間書院刊　A 5 判　307 ページ　本体価格 7800 円)

――国立国語研究所員――

(2001 年 7 月 17 日　受理)